

社会と生物における類似点と相違点

——ハーバート・スペンサーの「Social Organism」(1860)——

高木俊之*

1. 翻訳

ジェームス・マッキントッシュ¹⁾は、「憲法は作られるものではなく、成長するものである」という大きな賞賛を得た格言を残した。現代において、この格言の最も重要な点は、この格言が重要なものだと考えられ続けていることである。ある人が身近な事実に示す驚きから、その人の一般的な教養を判断することができるように、ある時代が新しい思想に与える賞賛から、その時代の平均的な啓蒙の程度を推し量ることができる。マッキントッシュのこの警句が引用され、再引用され続けていることは、社会科学の無知がいかに深かったかを示している。小さな真実の光は、暗闇の中の遠くの燈火のようにゆらめいて見えるのである。

このように、観念はそれがまったく異質な思考体系のただなかに落下させられたとき、ぎょっとされないはずがない。一般的にマッキントッシュの時代には、現代においても大多数がそうであるように、物事は成長の仮説よりもむしろ「創造の仮説(hypothesis of manufacture)」に基づいて説明されていた。惑星は創造主の手によって、太陽の引力からバランスをとるのに必要な速度で、それぞれ太陽の周りを回っていると考えられていた。地球の形成、海と陸の分離、動物の生産は創造主の機械的な作業であり、また労働者が休息するように神も休息するのである。さらに人間は、人形職人が土偶を作るのと同じような方法で形作られたと考えられていた。

クロムウェルが永続的に新しい社会状態を確立することに失敗し、彼の死後、抑制されていた制度や慣習が急速に復活したことは、君主が統治する社会のタイプを変えることがいかに難しいか(powerless)を示している。君主は、自然な組織化の過程を妨げたり、遅らせたり、助けたりすることはできる。しかし、このプロセスの大きな流れは、彼の手には負えない。いや、それ以上のことがある。

社会の歴史を偉大な人物の歴史とみなし、その偉大な人物が社会の運命を形作っていると考えの人々は、そのような偉大な人物が社会の産物であるという真実を見落としている。ある種の先例がなければ、つまりある種の平均的な国民性がなければ、彼らは生まれることもなく、彼らを形成する文化を持つこともできないのである。

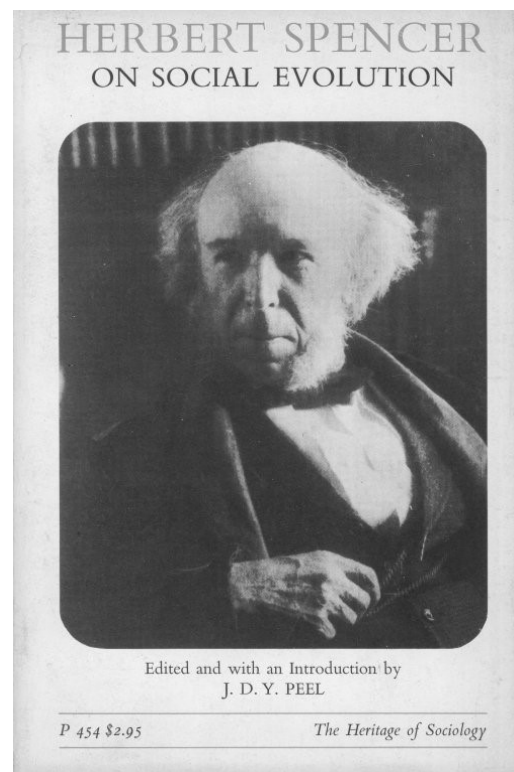


図1 スペンサーの肖像

資料: Peel (1972:表紙)から引用

人間の社会が人間によってある程度再形成されるのであれば、人間は生まれる前も生まれた後も、人間の社会によって形成されたのであり、彼らが受け継いだ祖先の性格を育み、彼ら自身の初期の偏見、信条、道徳、知識、願望を与えた社会は、あらゆる影響の結果なのである。従って、社会的な変化というものは、すぐさま並外れた力を持つ個人にたどりつくものであるが、そのような個人を生み出した社会的な原因に、なおも間接的にたどりつくものである。したがって、最も高い視点から見れば、そのような社会的な変化もまた、一般的な発達過程の一部なのである。

したがって、社会の産業構造について明白に真実と言えることは、社会の構造全体について真実なのである。「憲法は作られるものではなく、成長するものである」という事実は、社会がそのあらゆる側面において、またそのあらゆる分枝化(ramification)を通じて、成長するものであり、創造されるものではないという、はるかに大きな事実の断片にすぎないのである。

「国家の政治システムと個々人との間(between the body politic and a living individual body)」に何らかの類似性が存在するという認識は、早くから芽生えており、時折、文献に再登場していた。しかし、この認識は必然的に曖昧で、多かれ少なかれ空想的(fanciful)なものであった。生理学(physiological science)の、とりわけ最近になって到達した包括的な一般化がなかった時代には、真の類似点を見分けることは不可能だった。

—(中略)—

類似点と相違点を簡潔に述べて始めよう。社会は、4つの顕著な特質において生物(individual organisms:生物有機体)と一致する。

1. 最初は小さな集合体であったものが、しだいに質量が増大し、最終的には当初の1万倍に達するものもある。
2. 最初は無構造といえるほど単純な構造をしているが、成長する過程で、絶えず複雑な構造をとる。
3. 初期の未発達の状態では、各部分の相互依存性はほとんどなかったが、各部分は次第に相互依存性を獲得し、ついには、各部分の活動と生命は、残りの部分の活動と生命がなければほとんど不可能になる。
4. 社会の生命は、それを構成するユニットのどの生命からも独立しており、また、そのどの生命よりもはるかに長い。社会を構成するユニットは、個々に生まれ、成長し、働き、繁殖し、死んでいくが、国家の政治システム(the body-politic)は、世代を超えて存続し、質量ともに増大し、構造の完全性において増大し、機能的活動において増大する。

これら4つの類似点は、考えれば考えるほど、より重要な意味を持つようになるだろう。社会が生物と一致する一方で、個々の生物は互いに一致したり、一致しない点もある。あらゆる動植物は、その存在の過程で、無機物とは比較にならないほど質量を増していくのである。

例えば、結晶のような無機物でさえ、成長によって生じるが、成長と存在の間には、生物のような明確な関係は見られない。単純なものから複雑なものへの秩序だった進歩は、国家の政治システムと市民に共通のものであり、生物と無生物と区別する特徴であり、その中で彼らは動いているのである。部分への機能的な依存関係は、国家よりも動物に顕著であるが、これと対応するものは他にはない。また、生物学的や社会的なものを除けば、どのような集合体においても、部分の絶え間ない除去や交換は、全体の継続的な完全性と結びついている。

さらに、社会と生物は、このような特殊性において似ているだけでなく、他のすべてのものと異なっている。しかし、最高度の社会は、最高度の生物と同様に、その程度が最も高い。

最も下等な動物は、高等な動物のような大きさまで成長しない。同様に、原住民の社会(aboriginal societies)はその成長に比較的限界があることがわかる。

文明化した大国は、その複雑さにおいて、哺乳類(mammal)とサンゴやイソギンチャクなどの植虫(zooplyte)がそうであるように、原始的な未開の部族を遥かに凌駕している。単純なコミュニティは、単純な生き物のように、各部分の相互依存性が非常に低いため、切断や細分化をしてもほとんど不都合はない。しかし、複雑なコミュニティは複雑な生き物と同様に、重要な機関(organ)を残りの機関に大きな障害や死を生じさせないで、取り除

くことはできない。

また、劣等な動物と同じように、低タイプの社会では、集合体の寿命は、しばしば分裂や分解によって短くなるが、構成ユニットの寿命をはるかに上回る。文明化された人間社会や優れた動物に比べれば、その構成ユニットが何世代にもわたって長生きすることは非常に少ない。

一方、社会と生物の主な違いは以下の通りである。

1. 社会には特定の外的形態がないこと。しかし、これは対照的に言っているだけで、その重要性を失っている。実際、植物界(vegetal kingdom)全体や動物界の下層部では、形態が非常に不定形であり、定型であることはむしろ例外なのが自然界の法則である。また、いずれ明らかになると思われるように、あらゆる種の生物の形態は、種として進化する過程でその生物が受けてきた外力の平均的な作用の結果である。ならば、社会の外的形態が周囲の条件に依存することは、人間社会にとっても重要なポイントとなるだろう。

2. 生物が構成する生体組織(living tissue)は「連続した塊(continuous mass)」を形成しているが、社会の生体要素は連続した塊を形成していない。が、多かれ少なかれ地球表面の一部に広く分散していることも確かである。このことは、一見すると絶対的な区別のように見えるが、あらゆる事実を熟考してみると、かなり薄いである。というのも、動物界や植物界の下層部には、この点で、想像以上に社会と同系のタイプの組織が存在するからである。このタイプの組織では、塊を本質的に構成する生きたユニットが、言葉の完全な意味で生きているとは到底呼べない不活性物質(inert substance)の中に分散している場合がある。原生生物(Protococci)の一部や、粘性物質の中に細胞が埋め込まれたように存在するバクテリアのネンジュモ科(Nostocaceae)もそうである。未分化のゼリーの中に分散した部分からなるThalassicolloeもまたそうである。さらに、体のかなりの部分で、多かれ少なかれこのような構造を示すハチクラゲの一種(Acalephoe)もいる。

さて、これは社会と非常によく似ているというのも、社会を構成する人々は物理的には別個であり、しかも散在しているからである。しかし、彼らが散在している表面には生命がないのではなく、彼らの生命に奉仕する低次の生命に覆われているのである。

ある国を覆う植生は、その国における動物の生活を可能にする。そして、そのような国は、動物と植物の生産物によってのみ社会を支えることができる。それゆえ、国家の政治システムの構成員は、デッドスペースによって隔てられているのではなく、より低次の生命が占める空間の中に拡散していると見なされるべきである。「生物学的社会(social organism)」という概念には、人間の存在、ひいては社会的存在が依存しているより低次の生物の存在すべてを含まなければならない。上記の例と同様に、人間社会を構成する市民は、生命力の低い物質に取り囲まれ、そこから栄養分を得ている、高度に生命化された単位と考えることができる。

3. 第三の相違点は、生物の究極的な要素は、その相対的な位置がほとんど固定されているのに対し、人間(social organism)は、場所から場所へと移動することができるという点である。しかしここでも、意見の相違は想像されるよりもずっと少ないのである。というのも、人間は私的な能力においてはいわば「機関車」であるが、公的な能力においては固定されているからである。農民であれ、製造業者であれ、商人であれ、人は生涯を通じて同じ場所で事業を営むことが多い。そして、彼らが時折留守にするとしても、留守の間にその機能を果たす他の人々を残していく。それに対して、各生産拠点、各製造業の町や地区は、いつも同じ場所にある。そして、そのような町や地域にある企業の多くは、創業者の子孫や後継者によって代々受け継がれていく。

生物の体は、ある重要な器官を構成する細胞は、その機能を一時的に発揮した後に消滅し、他の細胞がその代わりをするのと同じように、社会の各部分においても、機関は残るが、それを構成する人は変わるのである。このように、社会生活では、動物の生活と同じように、それを構成する最小の単位も、その単位から形成されるより大きな機関も、その任務を遂行し、栄養を得る場所に関しては、基本的に静止している。したがって、個々の移動能力は、この類似性に実質的な影響を与えない。

4. 最後の、そしておそらく最も重要な区別は、動物の身体では特別な組織だけに感情(feeling)が備わっているのに対し、社会ではすべての構成員に感情が備わっているということである。しかし、この区別も完全なものではない。というのも、神経系が存在しないことを特徴とする最も下等な動物の一部では、存在するような感覚はすべての部分に備わっているからである。より組織化された形態においてのみ、感覚は生命要素の一つの部門(class)によって独占されるのである。社会にも、この種の分化がないわけではないことを忘れてはならない。人間社会の構成単位はすべて感情を持つ(sensitive)が、その程度は不均等である。労働的職業に従事する階層は、知的にも感情的にも、他の階層よりも感受性が低い。それに対して、精神文化の高い階層ほどそうではない。

それでも、ここには国家の政治システムと個々の市民との間に、かなり明確な対比がある。そしてそれは、私たちが常に心に留めておくべきことでもある。なぜなら、個々の市民においては、すべての部分の幸福が、神経系の幸福に正しく従属し、その楽しいあるいは苦しい活動が人生の善し悪しを構成している。それに対して、国家の政治システムにおいては、同じことが成り立たないか、あるいはごくわずかな程度にしか成り立たないことを思い起こさせるからである。動物のすべての部分の生命が、全体の生命に統合されるのは構わない。全体が幸福にも不幸にもなりうる調和的意識(corporate consciousness)を持っているからである。

しかし、社会はそうではない。なぜなら、社会の構成単位は個人の意識を失わないし、失うこともできないからである。そして、人間社会(community)は全体が調和的意識を持っていないのだから。これが、市民の幸福を国家の利益のために犠牲にすることができない理由であり、国家が市民の利益のためだけに維持されなければならない理由である。調和的生命(corporate life)は、全体に部分が従属するのではなく、部分に全体が従属しなければならないのである。

つまり、ここまで述べてきた類似点と相違点であるが、相違点は、類似点をより明瞭に浮き彫りにするためだけのものだといえないだろうか。

比較は、一般にそう呼ばれる生物と社会との間の明白な対照を明確にする一方で、これらの対照さえも、予想されたほど決定的なものではないことを示している。形態の不明確さ、部分の不連続性、普遍的な感受性の強さが、社会の特殊性であるというのは、かなり限定して述べなければならない。それらは劣等動物が近似している特殊性でもあるからである。このように考えると、重要な類似点と対立するものはほとんどないのである。

社会はゆっくりとその質量を増し、構造の複雑さを増し、同時にその各部分はより相互依存的になり、その完全性を破壊することなく、その一部が取り除かれたり入れ替わったりする。これらは、社会が生物と共通して持つ特質である。そして、社会が生物と一致し、他のすべてのものと一致しないこれらの特徴は、マイナーな区別を副次的なものにする。このような区別は、有機物王国(organic kingdom)の半分ともう半部分を隔てる区別よりも、ほとんど大きくない。組織の原理は同じであり、違いは単に応用の違いである。

ここで、社会と生体の比較を正当化する事実の一般的な調査を終え、詳細を見てみよう。社会と生物の同時並行的性質(parallelism)は、詳しく調べれば調べるほど顕著になることがわかるだろう。

2. 解説

近年わが国における社会学の入門書では、ハーバート・スペンサー(1820-1903)が全く省略される場合も散見される。社会学前史としてサン=シモンに触れ、いよいよ社会学の元祖としてコント、スペンサー、次にその少し前だが同時代人としてマルクスについて述べるならまだしも、コントの次にマルクスを紹介して、スペンサーを全く省略する社会学史には賛成できない。

スペンサーは『社会学原理』で「社会は有機体(organism)である」という言葉を生み出したという(挾本 2020:35)。言い換えて「社会は生物である」なら、「社会は生きている」と考えて生物との対比で社会の発展や成長を考える発想は、社会学の歴史には必要だったのである。

そこでハーバート・スペンサーの「Social Organism」から、冒頭に述べられたフランスの憲法に関する格言の部分と最も重要な「類似点と相違点」について改めて翻訳してみた。

このスペンサーの「Social Organism」は、『ウェストミンスター・レビュー』に 1860 年に発表され、1868 年

にスペンサーの論文集(Spencer 1868)に収められた論文である。その後もシカゴ大学出版の「社会学の遺産」シリーズ(Peel 1972)、スペンサーの著作集(Spencer 1996,)など、スペンサーの著作といえれば必ずといってよいほど含まれている重要な論文である。

わが国においては、波・斯邊鎖氏著『社会組織論』として1883年(明治16年)に『セームス、マシントーシ』氏曾テ言ヘルアリ曰ク政體ハ自然ニ因リテ成ルモノニテ人為ニ因リテ成ルモノニ非ス」という漢文調の全訳が出版されている(山口松五郎訳 1883:1)。1883年と言えば、1877年の西南戦争の6年後であり、1889年の大日本帝国憲法発布の6年前である。外山正一はすでに東京帝国大学で何らかの講義をしていた時期であるが、それとは別個に「Social Organism」の翻訳が公刊されたことは、「政府ヲ建設スルノ目的ハ人民ヲ保護スルモノニシテ政府ノ徒ニ名ヲ社会ノ公益ニ借リテ人民ノ幸福ヲ犠牲ニ供スルヲ正理ノ容サルハ蓋シ此理ニ基クモノナリ」(山口松五郎訳 1883:50)と宣言する本論に対する関心が、明治の自由民権の時代にいかに高かったことの証左である。

その後、この「Social Organism」は自由民権論の文脈ではなく、社会を人間同士の相互依存からなり、自ら成長する生物のようなもの(有機体)として考える社会学の創始者の一人としてのスペンサーを紹介する文脈で、社会と生物の類似点と相違点の部分だけが紹介されることになった(馬場啓之助 1948; 清水幾太郎 1970)。ここでは、「憲法は成長するものである。歴史上の偉大な人物も社会的に形成される」というくだりは省かれている。いわばフランス革命の硝煙が、スコットランド啓蒙に位置づけられるマッキントッシュにまで届いて、「フランス擁護論」が書かれたこと。この引用からやはりスペンサーはフランス革命に関して、コントと共通のベクトルを持っていたことは、入門レベルにおいても理解すべきことだろう。

さて、本論文を翻訳するにあたって最大の難点は、最も重要な「the body politic」にあてる訳語に日本語では最適なものがないことだろう。「the body politic」は、山口松五郎は「全体」、清水幾太郎は「社会体」、馬場啓之助は「社会」、安西文夫も「全体」としている。政治体制を意味する「政体」は用いられていなかった。もちろん「国体」も用いられていない。

そこで、今回の翻訳は「the body politic」を「国家の政治システム」と訳すことにした。そうすると「between the body politic and a living individual body」が「国家の政治システムと個々人との間」ということになる。より単純化するなら「国家と個人の相克」を意味すると考えてよいだろう。そう理解しないと、前述の「市民の幸福を国家の利益のために犠牲にすることができない」が生きてこない。

次に「Social Organism」は、従来「社会有機体」と訳されている。生物のアナロジーで社会を考察する「生物学的社会学」の最重要キーワードであろう。今回の翻訳では二カ所に出てくるが、現代の文科系の学生にとっては「有機体」という用語よりも「生物」の方が馴染みやすいために、一ヶ所を「生きものであるかのような社会」として「生物学的社会」とした。それは、社会と生物の境界を曖昧にして、社会を生物のように看做して理解する思考方法である。もう一ヶ所はアリストテレスのいう「社会的生物」を意味する「人間」と訳した。後者においては、スペンサー自身もこの用語を使いきれていないと感じた。

最後に、アメリカ社会学史の研究者ジョナサン・ターナーは、スペンサーの社会的分析様式は、以前に出版した『生物学原理』から導き出されたものであったとした。その結果、彼は社会学を、後に「超有機的な(super-organic)」身体(すなわち、有機体間の組織化された関係)と呼ばれるものの「形態学と生理学」に重点

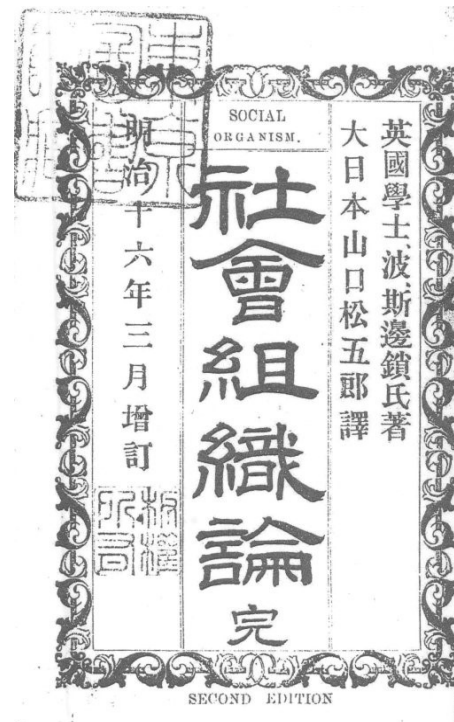


図2 1883年に全訳された『社会組織論』表紙

資料: 国立国会図書館所蔵

を置くものと考えた。したがって彼の社会学観は、構造（形態学）へと組織化される過程（生理学）を研究しなければならないというものになった。個々の生物(individual organisms)の構造と機能の一般的な分析様式と、そのような個体からなる「社会(social organisms)」との間には並行性があるとスペンサーは主張したのである(Turner,1985:20-21)。

「形態と生理」を「構造と機能」に置き換えて、それが「軍事型から産業型」へと進化していくのがスペンサーの総合社会学の発想であると理解した。

注

- 1) Online liberty fund の HP 「Quote James Mackintosh on how constitutions grow and are not made (1799)」

(<https://oll.libertyfund.org/quotes/james-mackintosh-on-how-constitutions-grow-and-are-not-made-1799>)によると、ジェームズ・マッキントッシュ卿（1765-1832）は、スコットランドのホイッグ党の政治家であり、道徳哲学者であった。フランス革命の時代に執筆し、自由な憲法とは、時間をかけて徐々に発展していくものであり、人間が暴力行為によって一度に作り上げたものではないと考えた。1791年に発行された『フランスの擁護(Vindiciae Gallicae)とフランス革命に関するその他の著作』からの引用。2024年1月31日閲覧。

田中秀夫によると、「フランス革命をいち早く断罪したパークの『フランス革命の省察』(1790)は多くの反論を招いた。パークの反革命に我慢ならず、マッキントッシュは『フランス擁護論』(1791)を書いた。それは哲学的で雄弁でもあり、フランス革命を支持するものとして、急速に普及し広く読まれた。ペインの『人間の権利』より高く評価する人もある」という田中（田中 2019:12）。

引用文献

安西文夫,1949,『社会学史概説』中文館書店。

馬場啓之助,1948,「イギリス社会学」東京社会科学研究会編『社会学史』（現代の社会学第2巻）実業之日本社:171-221。

挾本佳代,2020,「H.スペンサー——進化論思想と社会学」仲川秀樹編『社会学史入門——黎明期から現代的展開まで』ミネルヴァ書房。

Herbert Spencer, 1860, “Social Organism” in *The Westminster Review* for January (Herbert Spencer, 1868, *Essays: scientific, political, and speculative vol.1*. Williams & Norgate (in Herbert Spencer, 1996, Herbert Spencer: Collected writings Routledge/Thoemmes Press) (山口松五郎訳, 1883, 『社会組織論—完』加藤正七発行)

Peel J.D.Y., 1972, *On social evolution: selected writings Herbert Spencer* (The heritage of sociology), University of Chicago Press

清水幾太郎, 1970, 「コントとスペンサー」清水幾太郎責任編集『コント・スペンサー』（世界の名著 36）中央公論社: 7-46。

田中秀夫, 2019, 「スコットランド啓蒙の拡散と終焉——道徳哲学の解体と経済学的发展」『経済学研究』（愛知学院大学）第6巻第2号: 1-22。

Turner Jonathan H., 1985, *Herbert Spencer: a renewed appreciation* (Masters of social theory, v. 1) Sage Publications.